

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第640号 平成25年11月11日

凡事と非凡

「ユニ・チャーム」という会社で企画本部長等をされている坂口勝彦氏は、日本経済新聞に「凡事の徹底が非凡を生む」と題する一文を掲載しています。

「凡事徹底」とは昔からいわれてきた言葉ですが、「ユニ・チャーム」には、この「凡事徹底」という思想を実際の事業運営に活かしているといえます（8月14日付日本経済新聞から）。人を育てるのに王道はなく、凡事の徹底が非凡な才能の開花に繋がるという訳です。

ところで、「ユニ・チャーム」という会社は、皆さんもご案内の通り、ベビー用品や生活用品、マスク、介護用品等女性をサポートする製品で成長してきた企業です。

「ユニ・チャーム」には「NOLA & DOLA」という企業理念があるそうです。この「NOLA & DOLA」というのは、「Necessity of Life with Activities & Dreams of Life with Activities」の略で、その意味するところは、「赤ちゃんからお年寄りまで、生活者をサポートする商品やサービスを提供する事により、誰もがいつまでも自分らしく暮らすことが出来る社会を実現する」というもので、会社の目標が明確で、格調が高く、この企業理念が「ユニ・チャーム」の成長を支えて来たというのも頷けます。

また、「ユニ・チャーム」には、

- ・ 尽くしてこそナンバーワン
- ・ 変化価値論
- ・ 原因自分論

という3つの価値観があり、それを全社員が共有しているといえます。

これらの価値観について坂口氏はこう説明しています。

まず1点目の「尽くしてこそナンバーワン」については、「企業の利益はお客様の満足度を表したものであり、利益率が高い企業は高い満足度が提供できている」と述べています。

これは、企業は利益追求の前に顧客満足を高める努力が不可欠だという事であり、こうした顧客を第一に考える姿勢には、学ぶべきものがあります。

2点目の「変化価値論」については、変化こそ価値を生む源で、社会の変化に柔軟に、そして速く自らを変化させることが出来る人材こそ成長すると述べています。

時代の変化をしっかりと捉え、その変化に能動的に対応するというのは、口でいう程簡単ではありません。自己改革は、改革の中でも最大の難関です。

3点目の「原因自分論」については、失敗の原因を環境の変化や上司に求めず、まずは自分の事として受け止める事が重要だと述べています。

失敗の原因を他者に求めるのは簡単な事です。例えば、「自分は一生懸命子ども達を教育したけれども、子どもが勉強しなかったので成績が悪かった」というのは、北海道の子ども達の勉強時間は他府県の子と比べると少ないという現実を見れば如何にも説得力がありそうですが、その前に、自分自身の教育力はどうか、脚下照顧が必要でしょう。

さて、「ユニ・チャーム」は、高い企業理念と行動原理のもとで企業活動を展開していますが、そのベースにあるのが先程述べた「凡事の徹底」です。

「凡事」というのは「平凡で、ありきたりな事」という意味ですが、この「平凡でありきたり」な事というのは、どの様なものなのでしょう。

「大事は小事より起こる」という諺がありますが、「凡事」というのは、この様に事の大小を指しているのでしょうか？

学校を巡っては、時に教育委員会や保護者を巻き込んで大騒動になる様な大きな問題が発生しますが、冷静に振り返って見ると、ハインリッヒの法則を持ち出す迄もなく、それ以前にヒヤリとしたりハッとしたりする様な小さな出来事（問題）が幾つもあった筈です。恐らく、皆さんの中にもそうした経験をお持ちの方は沢山いらっしゃる事でしょう。しかし、私は、「凡事」というのは、そうした事の大小をいっているのではないと思っています。

演出家として有名な蜷川幸雄氏は、こういう事をいっています。

「演出家の前に、まず人間として信頼してもらわなきゃいけない。ぼくは劇場や稽古場に遅刻しないことを基本の一つにしています。富士山に登るのと同じで、いつも5合目から登るのではなくて、きちんと下から登ることを常にやらないといけないと思っています（Kajima 2008年1月号）。」

「遅刻しない」というのは、社会人として当たり前ですが、私は、こうした当たり前の事を徹底する姿勢こそ「凡事の徹底」という事なのではないでしょうか。

また、経営の神様といわれた松下幸之助氏は、従業員の挨拶、工場や事務所の整理整頓、トイレの状況、この3つを見ればその会社の経営状態は大体判るといわれたそうですが、これも「凡事の徹底」の重要性を指摘しているといってい良いでしょう。

挨拶をする、約束を守る、期限を守る、人間関係を大事にする、こうした事は一人の社会人（職業人）として当たり前の事ですが、更にいえば、例えば、一人ひとりの子ども達にしっかりと目を注いでいるか、子ども達を好き嫌いで判断していな

いか、組織の一員として校長や教頭、教職員と連携を取っているか、更には、保護者との意思疎通に努めているかといった事も、教師としては当然意識しておくべき事です。

そうはいつでも、この当たり前の事を当たり前にするというのは、出来そうでいて実はそう簡単ではありません。だからこそ私達は、当たり前の事を当たり前に出来ているかどうか、日々自省する必要があるのだと痛感しています。

(塾頭：吉田 洋一)